三十年のあゆみ

これが「ばか踊り」から始まった「高円寺阿波おどり」のあゆみです。一年一年を箇条書にして、写真と組み合わせ、欄外にはわかる範囲で、出演連数・連員数、観客数、新聞掲載数・テレビ放映回数、そして時のうごきを記しました。

山あり谷ありの道のりを少しでも感じとっていただければ幸いです。

〈森田昇栄〉

第1回（昭和32年）

①八月十三日、高南商盛会（現高円寺南商店街振興組合）に青年部が誕生。その記念行事に氷川神社の祭礼（八月二十七・二十八日）の奉納の催しと、あわせて商店街の振興策と、地域住民の健全なレクリエーションに資するための諸案を検討。当時阿佐谷の商店街など各地で仙台の「七夕」を取り入れ名物になっていたので、「こちらは南国ムード」で「商店街を練り歩ける」「阿波おどり」を行うことを、誰も阿波おどりをわからぬまま決定。

②名称は、高円寺独自のものをということで「高円寺ばか踊り」に意見が一致。

③おどりは高円寺在住の立花先生（男）に指導をうける。ところが、先生に教わった「阿波おどり」は、「一歩進んで二歩退り二歩飛んで見得をきる」というもので、一・二・三・四と号令がかからなければ間違えるという阿波おどりとは似ても似つかぬもの。それでも、皆大まじめに稽古。

④本番前、踊り手は揃いの浴衣で長仙寺に集合。庫裡で一人一人、先生からお白粉、眉墨、口紅を塗りたくられ、みな「化け物」となる。

⑤いよいよ出番、長仙寺から出ようとすると黒山の人人人。胸はドキドキ、足はガクガク、震えが止まらないので、コップ酒を一口飲んで、その勢いを借りて踊り出す。

⑥当時は中央線は地上を走っており、商店街のはしの踏み切りから、桃園川の宝橋のところまでの約二五〇メートルの商店街を、ものの五分くらいで、踊る…踊るというよりは下を向いて一目散に突っ走る。その狼狽振りはおして知るべし。

⑦本番のおはやしはチンドン屋さんに依頼。カネ、大小タイコは揃ったものの、「阿波おどり」ならぬ「佐渡おけさ」のリズムを演奏。知らぬが仏で、大の男がこれが「阿波おどり」と大汗を流す。

第1回踊り風景

初期の立て看板

長仙寺での集合写真（第2回）

第2回①一方が回れ右をして男女がすれちがう踊り

高円寺商本通り商盛会 昭和三十四年度決算書

収入の部 科目	予算	実績	支出の部 科目	予算	実績
前期繰越金	2,00,000円	2,00,000円	電灯料	3,20,000円	282,345円
			移動費	20,000	8,100
会費	1,250,000	1,250,000	諸団体負担金	50,000	32,510
			区役所負担金	20,000	0
雑収入	2,000	3,200	植木維持費	15,000	13,100
			祭典費	10,000	400
総会参加費	5,000	5,000	衛生費	20,000	10,700
			青年部費	20,000	25,000
加入金		6,000	児童育成費	10,000	0
			新聞広告費	1,20,000	172,200
			宣伝費	420,000	482,000
			総会費	30,000	25,250
			事務費	30,000	24,652
			普通費	30,000	24,070
			原材料費	20,000	142,320
			人件費	20,000	17,300
			別途積立金	2,00,000	2,00,000
			印刷費	10,000	3,500
			事務所費		65,940
			バカ踊り助成金		40,000
			雑費	2,000	18,250
			翌年度繰越金		42,976
			予備費	2,511	
計	4,07,511円	4,54,631円	計	4,07,511円	4,54,631円

34年度決算書（ばか踊り助成金4万円）

●第1回／踊り手1連（男21名女12名）。見物人1日約2,000人。【なべ底不況・ロカビリー旋風・五千円札発行】

第2回（昭和33年）

①浴衣が、祭礼用のものから、踊り用の派手なものになる。

②踊りは、一回目よりずっと落ち着いた優雅な阿波おどりに。前年の急テンポの踊りから一変してスローテンポになり、踊り手の不器用な青年部員は大いに苦労。

③リヤカーにテープレコーダーを積み込んだおはやしが登場。

④東京新聞の記者が「ばか踊り」を取材。翌日の朝刊に「ナベ底ふっとばすバカ踊り」と紹介される。これが新聞に報道された第一号。

第3回（昭和34年）

①低迷を続けた「バカ踊り」をやるか、やめるかで、青年部の会合の度に議論百出。反対者が増え始め、結論は無記名投票で存続の決定をすることになる。

その結果は十対九の一票差で、もう一年続けてみることに決定。この一票が、逆の結果ならば今日の「高円寺阿波おどり」はなかった。

②踊りの指導が日舞家の西崎まゆみ先生に代わり、踊り方も、男子は「鳴子」を両手に打ち振りながらぐるぐる回るものに、女子は大きな「しぶウチワ」を持ち頭上でひらひらさせるものになる。

③おはやしは杵屋佐三造社中になり、本場顔負け、屋台を引っ張り歩く豪華版に。

④踊りの研究のため、浅草国際劇場へSKD「夏のおどり」を見学。

⑤「高円寺音頭」を、松竹歌劇団の関口典之氏の指導で製作。おどり当日の本番で、学生アルバイト十人に歌わせようとするも、一夜漬けの練習のため使いものにならず、小沢淳男氏、中居誠一郎氏が歌う破目になる。

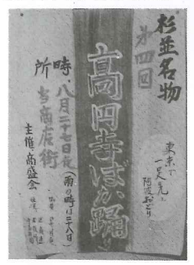
⑥杉並区総合文化祭写真展に踊りの写真四点出品。

⑦杉並新聞のトップ記事に「阿佐ケ谷の七夕に対抗して」と大きく名物バカ踊りが紹介される。

第4回（昭和35年）

①新道交法が施行され、警察の道路使用の許可が出ず、関係者が警察署、警視庁に日参。「阿波おどりは、非行防止の役に立つ」などの必死の説得も徒労にみえ、留置場入り覚悟で強行予定。しかし前日になってようやく一日だけの使用許可が出る。

②この許可問題が地元杉並新聞に大きく掲載され、話題となって他の新聞社の注



第4回の手書きポスター

第3回②しぶうちわを持って踊る（右端に関口先生）

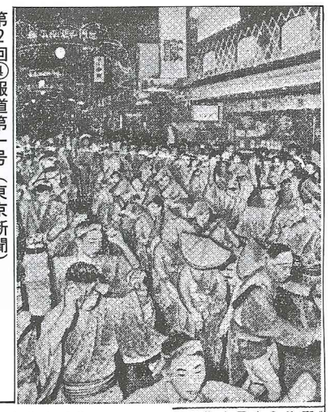
第3回②鳴子を持って踊る

ばか踊り宣伝カー（第2回）

第3回⑥出品四点の中の一つ

第4回⑤リヤカーにスピーカーを付けて

高円寺駅にも装飾（第4回）



第2回④報道第一号（東京新聞）

ナベ底ふっとばすバカ踊り

高円寺商店本通りで

○……踊りのほうに見るあほうでおどらにゃ損そんの四国の徳島名物阿波おどりの日曜どしたらと二十八日夜、杉並区高円寺駅前は本通り商店街の約四千人余りの〝バカ踊り〟の一行が繰り歩いた。二十七、八の両日に行われている区民祭りの氷川神社の祭礼にちなんだ催しの一コマ。

「写真の説明」…昨年の浅草国際劇場、旋風を巻起こした「夏のおどり」を見学した高円寺の踊り子たち。二十五百年後、時かも二千五百の長寿（東京）で改宗会を開いた。席上、祭礼の祭典費の提供、寄付など総計は二百三十八人、寄附は二百三十六件で、毎日平均八件の寄附があったという。この内訳は、負傷者が二百二十一件で

第5回（昭和36年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「ばか踊り」の名称を、「高円寺阿波おどり」に改称。

③「ばか踊り助成金」を、区役所から、高円寺商盛会に交付される。

④「ばか踊り」の名称を、「高円寺阿波おどり」に改称。

⑤「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第6回（昭和37年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第7回（昭和38年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第8回（昭和39年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第9回（昭和40年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第10回（昭和41年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第11回（昭和42年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第12回（昭和43年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第13回（昭和44年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第14回（昭和45年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第15回（昭和46年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第16回（昭和47年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第17回（昭和48年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第18回（昭和49年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第19回（昭和50年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第20回（昭和51年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第21回（昭和52年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第22回（昭和53年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第23回（昭和54年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第24回（昭和55年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第25回（昭和56年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第26回（昭和57年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第27回（昭和58年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第28回（昭和59年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第29回（昭和60年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

第30回（昭和61年）

①「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

②「高円寺音頭」を、ビクターレコードで吹き込む。

●第2回／踊り手1連（男29名女12名）。見物人1日約5,000人。【東京タワー完成・フラフープ大流行】●第3回／踊り手1連（男40名女13名）。見物人1日約2万人。

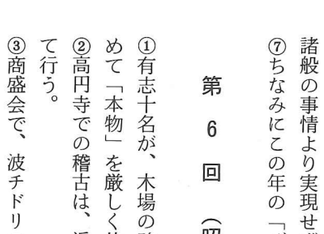
目を浴びる、という思いがけない余波あり。
③高円寺独自の「ばか踊り」として行ってきたが、今一つパッとしない、こんなことでは何年やってもうだつが上がらない、いっそのこと本場徳島の阿波おどり色を強く打ち出そうと、徳島新聞東京支社、県人会、徳島県東京事務所、徳島県物産斡旋所等を連日訪問。そこで、馬橋在住の作家三田華子さん、後年発展の力となった木場連の鴨川長二氏を紹介される。
④子供連が登場。
⑤踊りのスタイルは前年同様、おはやしはリヤカーにスピーカーを付けて、そろそろと引いて歩く。
⑥「バカ踊り」の記念スタンプが郵便局に設置された。
⑦八月二十四日の徳島新聞に「江戸っ子の阿波おどり、杉並の人気さらう」、と初めて本場徳島に写真入りで高円寺阿波おどりが紹介される。
⑧テレビ局、新聞社等に積極的にPR活動を開始。その結果、読売新聞城西版に「杉並三大行事」として報道されるなど、毎日、東京、サンケイ、杉並、徳島など各紙に計十五回紹介、テレビニュースにも初放映された。

第 5 回 （昭和36年）

①東京の深川・木場の徳島県人で組織する東京踊り会の武市氏の指導を氷川神社の二階で受ける。本物の指導を受けたのはこの時がはじめてであった。
②木場連十九名が初参加。これにより技量の上った年になる。
③浴衣を木場連より借用。
④地元銀行の協力を得て、チラシ広告を初めて作成配布。
⑤杉並・中野区内の映画館にスライド広告を出す。
⑥北口銀座商店会青年部から、踊りの参加申し込みの打診があるも、残念ながら諸般の事情より実現せず。
⑦ちなみにこの年の「ばか踊り」の予算は百万円。

第 6 回 （昭和37年）

①有志十名が、木場の鴨川氏宅へ伺い、踊り・おはやしの基本指導をうける。初めて「本物」を厳しく仕込まれる。以来急速に技術が伸びる。
②高円寺での稽古は、近所迷惑にならないよう、深夜に高円寺映画館を借り切って行う。
③商盛会で、波チドリの浴衣を作る。


第 6 回②映画館での稽古

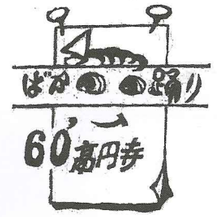
第 6 回⑥野村証券連

第 6 回⑩右側立っているのが鴨川氏

第 5 回②木場連の踊り

第 6 回⑧芸能人が初参加

第 6 回⑨ＴＢＳラジオ中継



第 4 回⑥記念スタンプ

第 4 回④子供連

盛況の模様（第5回）

江戸ッ子の阿波踊り
杉並の人気さらう
27日 本場顔負けのおはやし
山田眼科
第4回⑦徳島新聞に紹介される

●第４回／踊り手１連（男37名女，子供28名）。見物人１日約４万人。【ダッコちゃんブーム】●第５回／踊り手１連（男38名女，子供32名木場連19名）。見物人１日約８万人。＜各新聞に25回掲載，テレビニュース３局放映＞【ガガーリン飛行士地球を回る・歌－上を向いて歩こう】

④新高円寺通り商店会の二十数名が、自由参加に踏み切る。
⑤それに伴い、踊りのコースも従来の宝橋までから、草柳勝治氏等の尽力により、フジ薬局前の十字路まで延長。
⑥初めて企業連として野村証券が参加。
⑦徳島新聞社の阿波おどりの写真コンクールに、高円寺のおどりを撮影したものも応募が可能になり、九名が入選。
⑧宮田羊容・布地由起江の漫才コンビが芸能人として初参加。
⑨ＴＢＳラジオ「土曜パトロール」の生放送に出演。長仙寺境内の会場で十五名が踊る。
⑩「東京の阿波おどり」というＮＨＫ四国向け放送に出演、ＮＨＫ霞ケ関スタジオで木場連と共演。（木場からのお誘い）

第 7 回 （昭和38年）

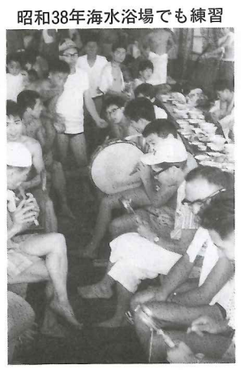
①正式に「高円寺阿波おどり」の名称を使用。
②商盛会のおはやし二組を新編成。
③警視庁第一機動隊九十人が警備にあたる。
④二十八日夕刻、猛烈な夕立のため、桃園川が氾濫し、出水。無念の思いで踊りは中止。（この年の踊りは前日の一日だけ）
⑤この年の踊りの予算は二百万円。

第 8 回 （昭和39年）

①「阿波おどり展」開催。阿波おどり画家として知られる正木茂画伯の力作十数点に、これまでの高円寺阿波おどりの写真、および徳島の物産展等を八千代信用金庫高円寺支店で展示。
②新高円寺商店会が正式に参加。
③ＴＢＳテレビが、スウェーデン向け「東京のお祭り特集番組」の取材で大ロケーション敢行。
④「学べ徳島」と徳島新聞社のご好意で、本場徳島の有名連を８ミリに克明に収録。その後の練習会で上映、技術の向上に役立つ。
⑤また翌年に徳島阿波おどりを視察するため、積み立て貯金を開始。
⑥「題名のない音楽会」（ＮＥＴ）四十名、「十二の関所」（東京12チャンネル）十五名、いずれも杉並公会堂に出演。

第８回③ロケーション模様

第７回自由参加した新高円寺


昭和38年海水浴場でも練習

第８回②新高円寺商店会参加

第９回⑥内外タイムス取材風景

第８回⑥「十二の関所」

A 組	商盛連	
1	鳥子	男
2	田子	子
3	猿喚	喚
4	間子	子
5	河子	希
6	中子	子
7	田子	英
8	中月	江
9	城代	子
10	岩月	嘉
11	鈴雲	佐
12	小一	江
13	中紀	子
14	細一	子
15	小紀	江
16	石女	子
17	河後	江
18	須藤	子
19	椎佐	子
20	田名	エ
21	田中	子
	女子	子
	はやし	夫
	富武	一
	鶴島	維
	江関	忠
	齊藤	作
	石川	義
		長
		忠
		義
		金
	男子	広
	河原	男
	小沢	淳
1	河原	一
2	森田	之
3	小畑	猫
4	柴田	夫
5	手賀	安
6	小畑	職人
7	朝井	国
8	細井	民
9	井筒	謂
10	関根	敬
11	太田	治
12	原	三
13	若王子	郎
14	西川	次
15	今枝	春
16	齊藤	醸
17	坂巻	究
18	小谷	且
19	長谷	元
20	中村	功
21	泰田	柴
22	小林	一
23	神藤	郎
		柴
		雄
		一

B 組	協演連	
1	鳥子	子
2	田子	英
3	猿子	子
4	間百	百
5	河合	合
6	中子	子
7	田子	子
8	中子	英
9	城代	智
10	岩月	子
11	鈴雲	子
12	小一	雄
13	中紀	津
14	細一	子
15	小紀	和
16	石女	久
17	河後	英
18	須藤	
19	椎佐	
20	田名	
21	田中	
	女子	
	演	
	協	
	塩野	
	原井	
	三橋	
	高村	
	吉鹿	
	中口	
	木島	
	野中	
	大田	
	木場連	
	はやし	
	野村証券連	

第６回踊り参加者及び編成

●第６回／踊り手２連（木場連野村証券連参加計103名）。見物人１日約10万人。＜各新聞に25回掲載，テレビニュース１局放送＞【三河島事故・堀江謙一ヨットで太平洋横断・歌－王将・東京都人口１千万人突破】●第７回／踊り手３連(木場連含めて250名）。踊り８組。見物人１日約10万人。＜各新聞に26回掲載，テレビニュース等６回＞【米大統領ケネディ狙撃さる・歌－こんにちわ赤ちゃん・新千円札（伊藤博文）登場・力道山刺される】●第８回／おはやし４連踊り10連（350名）。見物人１日約10万人。【東京オリンピック開催・東海道新幹線開業・新潟地震発生・ニットウェア，ノースリーブ流行】

第 9 回 （昭和40年）

①踊りのコースが青梅街道までの八百メートルに拡大。このころになると警察当局も好意的になり、踊り場拡大により観衆を分散することが事故防止になると、許可を出し渋ることもなくなる。
②またこの年から雨天順延が一日だけ認められるようになる。
③阿波おどり人気投票、阿波おどりセールを実施。
④商盛会が、二色染めの本場風踊り浴衣を新調。
⑤阿波踊り留学と称して、本場徳島へ商盛会の幹部有志十二人が訪問。大演舞場で堂々踊り出すものがあらわれた。
⑥内外タイムスより取材。約一頁の特集記事に。

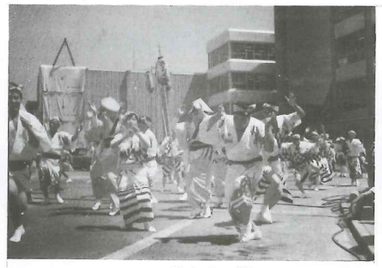
第 10 回 （昭和41年）

①高円寺阿波おどり十周年。八つの町会の理解及び協賛を得て、盛大になる。（協賛町会―氷川町会、緑ケ丘町会、エトアール通り商店会、馬橋一・二丁目商工会、高円寺南町会、高円寺南二・三丁目町会）
②高円寺駅南口広場が踊りのコースに入る。
③駅前広場にエースコックの大広告塔が出現、ムードを盛り上げた。
④阿波おどり宣伝隊を編成。昼間、町街や広場で、高円寺阿波おどりの景気を盛り上げる。
⑤徳島市観光協会などの阿波おどりのキャラバン隊一行四十名が南口広場で、観光宣伝を兼ねて踊る。
⑥宝橋際に百名を収容する桟敷を設置。近接町会の老年者を招待。
⑦いしだあゆみ、久保浩さんが雑誌「明星」のグラビア撮影のため特別参加。地元有志連二十名と一緒に桟敷の前で大熱演。
⑧緑ケ丘連、氷川町会連など多数の参加。
⑨新高円寺通り連では、前年の四連から一挙に七連を編成し参加。
⑩北口銀座商店会有志十三名が参加。
⑪ＮＥＴテレビ「アフタヌーンショウ」に出演（八十五名）、徳島と二元中継で、徳島から来た「たから連」とテレビ局前で共演。ところが、その時高円寺の商店街で六軒を焼失する火事がある。知らせを聞き、出演者はあわてて高円寺に戻ったものの、踊りうかれていた間の出来事で、浴衣姿も体裁が悪く、出演者はこそこそと帰宅。（八・一八）

第9回④新調の浴衣を着て踊る踊りの名手と天才児

第10回②駅前広場で踊る

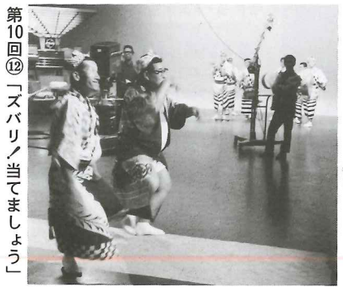
第10回⑪商店街が火事に



第10回⑪出演模様

第10回⑦明星に載った記事

第10回⑤徳島の観光キャラバン隊



第10回⑫「ズバリ！当てましょう」

第10回⑫「ちびっこトリオクイズ」

●第９回／おはやし８連踊り12連（500名）うち商盛会は，きらく連・こだま連・うずまき連・なかよし連・のびゆく連・紅雀連・陽気連・オール東京連。見物人１日約12万５千人＜テレビニュース５局放送＞【明治村開村・国鉄「みどりの窓口」，ミニスカート，チリ紙交換等現れる】●第10回／踊り手19連（800名）。見物人延べ約28万人【東京湾，羽田，富士山上空と飛行機事故相次ぐ・ザービートルズ来日・松代群発地震で大被害・ＮＨＫテレビ「おはなはん」

⑫ＴＢＳテレビ「はるみと歌おう」。高円寺選抜隊十一名が徳島の「たから連」と蜂須賀連小野正巳氏と共演（八・三一）。フジテレビ「ズバリ！当てましょう」小野・姓憶氏のお誘いで鳴物六名が選抜出演、小野正巳氏・姓憶政明氏のおはやしをつとめる（一〇・二九）。フジテレビ「ちびっこトリオクイズ」ちびっこが広いスタジオで大熱演（一二・五）。

第 11 回 （昭和42年）

①中央線が高架線となり、踏み切りが無くなり、踊りのコースが北口まで拡大、北口銀座十五屋前から青梅街道までとなる。
②高円寺北口の高円寺銀座商店会協同組合が正式に参加。
③「葵新連」「天狗連」の独立連が誕生。以後本格的な技術を目指す同好の士が集まり連を続々と結成。技術向上に貢献。
④徳島から小寺佐平会長、小野正巳連長率いる「葵連」（十五名）が姉妹連「葵新連」の誕生を祝って友情出演。本場の阿波おどり連が高円寺で見ることができたのはこれが初めて。
⑤「葵連」により踊り勉強会が、神戸銀行三階ホールで開催。本場の踊りに直に接した初の機会で、大変な人気。
⑥本場徳島をもっと知ってもらおうと、高円寺阿波おどり実行委員会は、本場ムードを盛込んだパンフレット「阿波おどりへのいざない」を作製。踊りのコツや本場の踊り情緒など、踊りてんごくのイメージを盛り上げ、実技練習とあわせて「踊り読本」として活用。

第 12 回 （昭和43年）

①明治百年を機に、警視庁の許可方針がゆるみ、阿波おどりが都内の各商店会などで始まるようになる。
《毎年増え続け、現在では二十ケ所をこえると思われる》
②高円寺阿波おどり写真コンテストが始まる。
③雨天で踊りは早めに切り上げられる。各連はそれぞれうさばらし。

第 13 回 （昭和44年）

①高円寺南口駅前の十八メートル道路完成。町会の多大な協力を得、大演舞場となる。（現在の中央演舞場）

第11回⑤「葵連」の勉強会

第11回④徳島から友情出演

東京から阿波踊り留学

高円寺踊り、に筋金

見物気分捨てて手ぐすね

昭和40年徳島留学時の徳島新聞

第12回②出展作品の一つ

第13回①待望の大演舞場で踊る

写真コンテスト入賞作品（第12回）

第11回②高円寺銀座商店会参加

●第11回／踊り手25連（1200人）。見物人延べ約30万人。＜新聞掲載21回，テレビニュース２局＞【美濃部革新都知事誕生】●第12回／踊り手30連（1400人）。見物人延べ約27万人【三億円事件・川端康成にノーベル文学賞】●第13回／踊り手35連（1600人）。【アポロ11号月面着陸】

第14回（昭和45年）

①この頃阿波おどりを年中行事とする商店会に呼びかけ、親睦および情報交換、技術指導、相互援授を目的とした「東京都商店街阿波おどり振興会」という組織を結成。（二、三年で自然消滅）

第15回（昭和46年）

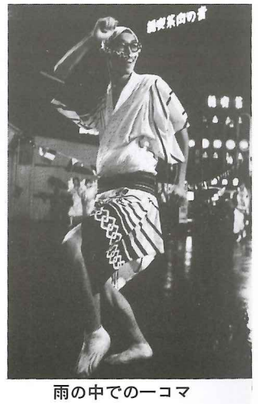
①十五周年、飛躍の年。高円寺に「東京名物あり」といわれるようになる。それは宣伝広告の力が大であった、その後の隆盛の大きな一因となった。
　チラシ、手書きポスターを貼り歩いたり、手書きの立看板を街頭に立てたそれまでの原始的なＰＲを卒業し、本格的なポスターを製作。国電の車内広告や駅貼り広告まで行う。
　このポスターについては、徳島出身で学生時代高円寺で踊っていた国安氏によるところが大。
②サンケイ新聞社の後援がつく。
③前夜祭がはじまる。
④昼間、南口駅前広場で写真コンテスト大撮影会を開催。（二年つづく）
⑤徳島県知事より、阿波おどり普及により感謝状をいただく。

第16回（昭和47年）

①徳島県知事、徳島市長より優勝旗等が送られる。
②本番中スリが一件発生するも、みごと犯人逮捕の快挙。また報知機のいたずらで消防車の空まわり騒ぎもあり。
③この年に、有力独立連がほぼ勢揃い。高円寺を彩る主力連が技を競いあう時代に入る。
④各地の公共的行事地域商店街の阿波おどり導入に、本格的指導にあたる。
⑤国鉄高円寺駅主催の「本場阿波おどり観光団」になんと五百名が参加。
⑥勤労青少年の日、中央大会に出演（於・国立代々木競技場第二体育館）

第15回⑤感謝状をいただく

第13回①高南通りの遠景（全通前）


雨の中での一コマ

第22回ジェラルド・Ｐ・カー宇宙飛行士来日

第18回②大地祭の模様

第16回⑥勤労青少年の日中央大会で

●第14回／踊り手38連（1750人）。【日航よど号ハイジャック・大阪で科学万博・杉並立正高校に光化学スモッグ】●第15回／踊り手40連（2000人）。【新宿に高層ビル建つ・天皇陛下欧州七ケ国歴訪】

第17回（昭和48年）

①広告ちょうちん用の電線が急に不足、そして大幅値上げ。ここにもオイルショックの前兆あり。

第18回（昭和49年）

①東京の阿波おどりの最盛期に入る。
　各地の「阿波おどり」に応援や指導、さらにはテレビ出演と繁忙をきわめた。
②池袋の「大地祭」始まる。阿波踊りを主体にしたお祭りで、高円寺が全面的にバックアップ。第九回まで続く。

第19回（昭和50年）

①各連同士の情報交換・協力・親睦をはかる目的で、十五連が「連長会」を発足。

第20回（昭和51年）

①徳島の踊り用品店、高円寺に夏期臨時店を出店。代替りをするも現在に至る。
②アメリカ建国二百年記念に「いろは連」を中心として海外遠征。（三月）
③朝日新聞社が後援となる。

第21回（昭和52年）

①高円寺阿波踊振興協会設立。

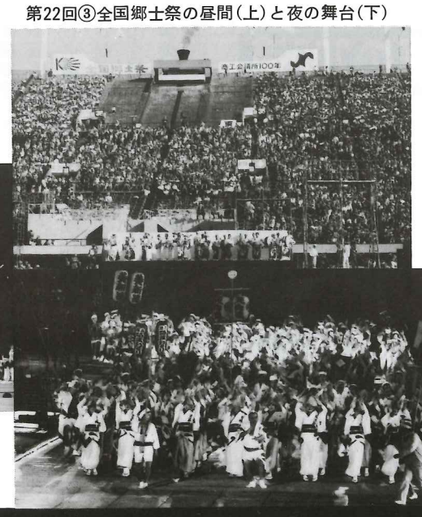
第22回（昭和53年）

①ホテル・サリ・パシフィックの招待により、ジャカルタに高円寺葵新連と徳島県阿波踊協会が遠征しジャパンナイトに出演。（九月）
②ドイツ・ハンブルグに高円寺連協会が遠征。（十一月）
③商工会議所百年記念、全国郷土祭に出演。天皇陛下ご臨席のもと、徳島からは百五十人、高円寺からは六百人が、昼は選抜隊、夜は全員で踊る。
　このことが、高円寺の連と徳島の連との交流が盛んになるきっかけとなり、全体の技術向上に大いに貢献。
④統一ゆかた（女踊り、男踊り、鳴物）作成。
⑤「阿波おどり新聞」発刊。
⑥このころ、「日本民謡まつり」、ＮＨＫ「日本民謡の祭典」「郷土芸能の祭典」等のステージが相次ぐ。

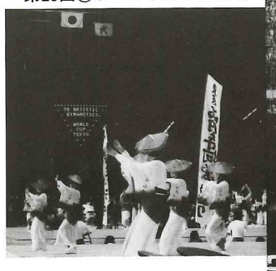
第23回（昭和54年）

①鈴木東京都知事がテープカット。以後恒例となる。
②合同選抜連の「オール高円寺連」が初めて徳島の阿波おどりに参加。徳島の街に高円寺各連のちょうちんが練り歩き、惜しみない喝采と賛辞を浴びる。約百名が参加。
③ワールドカップ世界体操選手権のアトラクションに出場（於・国立代々木競技場）（六・一）

第22回③全国郷士祭の昼間（上）と夜の舞台（下）



第23回③ワールドカップ会場



第22回⑥「日本民謡まつり」（於・国立劇場）

●第16回／踊り手43連（2200人）。見物人 延べ約45万人【横井さんグアム島で発見・高松塚古墳に極彩色壁画】●第17回【オイルショック・東京ゴミ戦争】●第18回／踊り手45連（2500人）。【小野田さんルバング島で発見・長島茂雄現役引退】●第19回／踊り手45連（2700人）。【エリザベス女王来日・沖縄海洋博】●第20回【ロッキード事件・植村直己北極圏走破・歌ーおよげたいやきくん】●第21回【チャップリン死去・王選手756号】●第22回【成田空港開港・世界初試験管ベビー誕生・テレビ「鳴門秘帖」】●第23回【東京サミット・鈴木都知事誕生・テレビ「なっちゃんの写真館」】

第24回（昭和55年）

①新たに都知事杯、区長杯を作成、優勝連に送られる。
②都内のホテルの観光案内や英字新聞に高円寺阿波おどりが紹介されだし、ウデ自慢の外国人ダンサーがフィーバー。
③消防百年全国大会が後楽園球場で天皇陛下ご臨席のもと行われる。徳島から百名、高円寺阿波おどりから二百名が合同で踊る。（一一・二七）

第25回（昭和56年）

①二十五周年記念行事として、よい子のみなさんに、踊りだけでなく情操の面でも向上してもらおうと、社会科見学会実施。浜離宮、朝日新聞社、NHK放送センターなどを回る。
②同じく二十五周年記念行事として、連協会主催の徳島旅行にバス二台、八十名が参加。
③「連長会」を発展解消し、「高円寺阿波おどり連協会」を設立。現場サイドから高円寺阿波おどりの発展に尽力する態勢を整えた。

第26回（昭和57年）

①東京都の国際文化交流事業による民間親善使節団としてハワイ訪問。ハワイ最大の祭り「アロハ・ウィーク」に百名参加。観衆の大歓迎をうけ、高円寺阿波おどり一行は国際民間交流の役目を立派に果たす。（九・一六～二一）
②杉並区が区制五十周年の記念映画「こころのあるまち杉並」を製作。ラストシーンに、みごとなカメラワークで高円寺阿波おどりの迫力満点の場面が紹介される。

第27回（昭和58年）

①深川・木場の天恵連（元・木場連）が二十年ぶりに登場。それは高円寺の阿波おどりの恩人、同連の元連長の鴨川長二氏（同年五月二十七日・七十五歳で死去）の追悼をかねたものでした。
②高円寺阿波おどり写真コンテスト再開。

第28回（昭和59年）

①南フランス・ニース市に招かれ、ジャパンフェスティバルに八十名参加。（一月）
②NHK教育テレビ教育セミナー「ふるさとの発見・高円寺の阿波おどり」放映。このおかげで、ながらく途だえていた氷川神社奉納阿波おどりが復活。
③横綱隆の里が、おどり開始のテープカット。

第29回（昭和60年）

①立教大学社会学部の松平誠教授の研究室が、高円寺阿波おどりを本格的に研究。
②大関大乃国が、おどり開始のテープカット。

昭和54年徳島新聞の記事

第24回③消防百年全国大会で

25周年で鈴木都知事がテープカット

第28回①テレビ画面から

●第24回【王選手現役引退・山口百恵婚約・テレビ「マー姉ちゃん」】●第25回【ローマ法皇来日・本一窓ぎわのトットちゃん】●第26回【ホテル・ニュージャパン炎上】●第27回【日本海中部地震・テレビ「おしん」・大韓航空機ソ連のミサイルで撃墜】●第28回／見物人延べ80万人【怪人21面相事件・エリマキトカゲに人気】●第29回／見物人延べ90万人【科学万博・御巣鷹山に日航機墜落】

高円寺での阿呆な調査のてん末

立教大学社会学部教授　松平　誠

大学が、町の踊りの調査をして、何になるのだ、とよく聞かれる。これがわたしの学問なのだ、と答えると、実に奇妙な呆れたような顔をされる。

たしかに、この調査は、これまでの大学や学者のイメージではかろうとすると、どうも直ぐにはみだしてしまう。だいいち、学生たちをけしかけて、二か月もの間、毎週のように、阿波踊りの練習をさせるゼミナールなど、あったものではない。踊りが最高潮に達して、連の皆さんが波のようにうねっていかれるなかで、馬鹿面をして調査する。これもまた、何とも阿呆な話しである。

それよりなにより、こんなにたくさんの関係者に迷惑をかける調査があっていいものだろうか。紙面の都合でお名前は省略するが、挙げていけば、この稿がそれだけで一杯になってしまう。年中変な質問を繰りかえして、散々呆れられながら、まだ飽きもせず、性懲りもなく、お邪魔するのであるから、余程、程度の悪い調査だとおもわれるであろう。

しかし、これがわたしたちにしてみれば、まことに大事な仕事なのだから、物好きといわれても仕方あるまい。でも、「泥棒にも三分の理」という諺もある。少しは、説明させていただいても、まあ許されることだろう。

わたしに言わせれば、高円寺の阿波踊りほどに、現代日本の社会と生活とを、よく表わしているものは少ないのである。

一般に、地域社会での文化を研究するというと、町のなりたちや、そこでの生活を実際に調べ、住んでいる土地での人々の結びつきを中心にして問題をたてていくのが普通のやりかたである。ところが、皆様先刻ご承知のように、この催しは、そんな枠組では、うまくつかまえることができない。

そこには、千葉の流山からきた連もある。山梨の大月からやってきた人々もいる。高円寺の街に支えられていることは事実であるが、町会が主体ではない。職場の連もあれば、身障者の連もある。呑み仲間の連から飛び入りの連まで、そのなりたちは、実にさまざまである。五十の連を結びつけるただ一つの糸である踊りも、その原産地といえば、阿波の徳島である。

何もかもが、これまでの民俗文化や地域生活の枠組には嵌らない。そして、そのような祭りが、数十万の見物客でごったがえす。五千人におよぶ踊り手が、一年にただ一度の出会いを阿波踊りの一点にかけて、真夏の夜に踊り狂う。

それは、現代がうんだ新しい人と人との結びつきの形を示しているのではないだろうか。

都市の新たな共同生活が、住む土地を超え、職場を超え、職業や地位、年齢や性のちがいをも超えて、つくりあげられつつあることのシムボルなのではなかろうか。こう考えると、この東京の夏の風物詩が、なんだか現代都市の演ずる魔法のように思えて、わたしの研究心は、ついムズムズしてしまうのである。

改めて申し上げるまでもなく、阿波おどりは徳島が本場である。四百年の歴史があるというから、高円寺の三十年とは桁が違う。それだけに踊り人口も多いし、技術の水準も高い。

高円寺諸連の中から代表的な囃し手踊り手だけを選んで一連を組めば、徳島の有力連に近い阿波踊りが出来るかも知れないが、徳島にはそのような力を持った連がたくさんある。いつの日にか徳島に追いつきたいと思ってはいても、しょせんかなわぬ夢かも知れない。

先年徳島のある有力連の幹部とお会いした時、足の裏の「踊りダコ」を見て、真底驚いてしまった。〝土ふまず〟から先の部分が大きく盛り上がり、カッチリ固くなっている。絶対に〝カカト〟をつかぬ修練の種み重ねが「タコ」を作ったのだ。こんな踊り手が高円寺にいるだろうか。

見かけの上では、技術の差はかなり縮まってみえる部分があるとしても、筋金の入りようが違うのだ。私達も三十年をステップにして一層の飛躍をするためには、「見かけだけの阿波踊りではなく、見る者に感動を与える本物の阿波踊り」へ、路線を変えなければならないだろう。

さて、高円寺と徳島との交流は、昭和三十九年頃から始まっているのだが、交流は主として連ベースで行われている。高円寺の各連が、技術の向上と踊りの心を学ぶべく、徳島の有力連と連携、各連各様の仕方で、交流している。現在、姉妹連関係を結んで、相互に協力し合っているのは、次の通りである。

徳島に学ぶ

関根　敏邦

徳島	高円寺
葵連	葵新連
阿呆連	江戸っ子連
阿呆連	いろは連
娯茶平	飛鳥連
平和連	天狗連
苔作連	苔作連

この他、高円寺の連ではないが、レギュラー参加している「東日連」は、徳島の「殿様連」と姉妹連になっていると聞く。また、障害者の「希望連」「竜のおとし子連」は、同じく徳島の障害者の連「鳴戸すだち連」と協力関係にある。

＊

高円寺阿波おどりの発展は、日本中で最も地の利を得た東京という好立地条件が背景にある。観客も集りやすいし、マスコミも飛びつく。ついつい、いい気になりがちであるが、三十周年を機に、本当の「踊り力」をつけるよう一層の精進が必要だと考える。

現状に満足することは、即、退歩を意味することを知らなければいけない。